

学校の怪談

中村まさみ

Masami Nakamura

5分間の
恐怖

臨死体験



中村まさみ
臨死体験

学校の怪談
5分間の恐怖



わたしは怪談好きが集まるSNSのグループ

「ゴーストコンテンツ」の管理人。

ここには、さまざまなこわい話、ふしぎな話が

日本全国、海外からもよせられる。

子どもたちが体験した、身の毛もよだつ怪異もね。

なかでも「学校の怪談」が多いのは

「学校」というところが、

なにか特別な場所だからなのだろうか……？



もくじ

レポート 1	動く折り紙 ^{うごおみ}	6
--------	-----------------------------	---

レポート 2	校外学習 ^{がくしゅう} のサプライズ.....	20
--------	-----------------------------------	----

レポート 3	タイムカプセルを開 ^あ ける日.....	34
--------	---------------------------------	----

レポート 4	わすれられた石.....	47
--------	--------------	----

レポート 5	本当の親友.....	59
--------	------------	----

レポート 6	人が死 ^し ぬ合図.....	76
--------	---------------------------	----

レポート 7	教室にいるもの.....	87
--------	--------------	----

レポート 8	ハト小屋 ^{こや} にいた子.....	101
--------	------------------------------	-----

レポート 9	百葉箱 ^{ひゃくようばこ} のアキラ.....	118
--------	----------------------------------	-----

レポート 10	2階 ^{かい} のトイレ.....	132
---------	----------------------------	-----

レポート 11	臨死 ^{りんし} 体験 ^{たいけん}	147
---------	--	-----

動く折り紙うご お がみ

ぼくの名前は新しん。

将来しやうらいは「怪談かいだんを語れるパティシエになりたい!」なんて、おかしなゆめを持も

つ小学4年生。

これは、まだ3年だった去年きよねんの春に体験たいけんした、とてもふしぎな話だ。

授業じゆぎやうが終わおったぼくたちが、いつもの下校路げこうろを歩いていると、反対はんたいがわの歩

道の上を、一羽わの大きなカラスがヨチヨチ歩いているのが見えた。

黒緑色くろりよくの体を、左右にふりながら歩くようすを見たぼくたちは、なんだか楽しい気分になって、急いそいで道をわたると、歩いていくカラスのあとをついていったんだ。

ところが、カラスは、自分のうしろから人間がつけてくるとわかったとたん、あわてて飛びあがると、そのまま車道にまいおりました。

「ああつ、あぶないぞーっ!!」

ぼくがそうさけぶ間もなく、前方から走ってきた大きなトラックに、カラスはひかれてしまった。

「うわっ、血ちが出てる!」

「なんか気持ち悪い、にげろーっ！」

ぼくといっしょにいた子たちは、口々にそんなことをいいながら、その場から走りさっていった。

だけど、だけどさ。

これって、ぼくたちのせいだよね……。

(なにか食べ物^{たもの}は落ちてないかな……)

きっとそんなことを考えながら、あのカラスは歩いていただけだったんだ。

それなのに、そのようすがおもしろいからってだけで生き物^{もの}をからかい、その結果^{けっか}、死^しなせてしまった。

そう思ったとたん、ぼくの目からなみだがあふれてきて、ぬぐってもぬぐつ

てもとまらなかった。

(あつ、そうだ！ あのままだと、他の車^{ほか}にもふまれちゃう！)

そう気づいたぼくは、カラスのなきがらを、近くの草原にうめてあげようと思った。

車^うがこないことをかくにんして、動^{うご}かなくなったカラスにぼくが近づいたとき、とつぜんぐつとかたをつかまれて、そのままうしろに引きもどされた。

おどろいてふりむくと、おまわりさんが立っている。

「やさしいな、きみは。ひかれたカラスを、うめてあげようとしているんだろ。だけど、きみはこのカラスにふれてはだめなんだ。」

野鳥というのは、いろんな菌きんを持っていて、不用意ふよういにさわったりすると、思わぬ病氣びやうきにかかってしまうこともある。

それにな、動物どうぶつの死体したいを、勝手かってにどこかにうめたりしてはいけないんだよ。

このカラスは、ぼくがめんどろをみるから、きみはもう家に帰りなさい。

だいじょうぶ、きみの氣持きもちちは、きっと伝わつたっていると思うぞ」

おまわりさんは、やさしい声でぼくにそういった。

（ちがうよ、おまわりさん、そうじゃないんだ。

このカラスが死しんだのは、ぼくたちがいたずら半分でからかったからなんだ）

そういおうと思ったけど、どうしてもいうことができなくて、ぼくは家にむ

かって歩きだした。

その夜は、死しんでしまったカラスのことが頭からはなれず、夕ゆふごはんものどを通とほらなくて、早はやめにふとんにもぐりこんだ。

次つぎの日、教室にいつてみて、おどろいた。

「それでさ、そのカラスったら、体が半分つぶされてるつてのに、ギャーき味みの悪いわる声を出しながら、こっちにむかってきたんだ！」

「ええーこわっ！ なにそれ!？」

「氣持きもちち悪いわる！」

きのう、カラスがトラックにひかれたことが、妖怪ようかいかなにかのおもしろい話

のようになってクラスのみんなに広がっている。

話の輪の中心にいるのは、きのう「気持ち悪い」といって、まっさきになげだした健也だった。

（健也、うそばかり!! そんなこわいことなんかあるもんか!

第一おまえ、まっさきにあの場からにげだしたじゃないか!）

そう思って、心は健也へのいかりでいっぱいなのに、ぼくは友だちの健也に、はっきりということができないでいる。そこがぼくのダメなところなんだ。

結局、健也のうそ話でもりあがってるのを横目で見ながら、ぼくは自分のせきについた。

やがて先生が教室に入ってくると、健也もあわててせきにすわった。ぼくの

となりに……。

いまいちばん見たくない顔なのに、今学期が始まってから、健也はずっとぼくのとおりなんだ。

「きのうは、にげちゃってごめんね。お願いだから、みんなにはだまって」
まわりには聞こえないような小声で、健也はこちらも見ずにいった。

はらが立っていたぼくは、わざと聞こえないふりをして、返事もなかった。

「あれ? なんだこれ?」

1時間目の国語が終わって、ぼくが次の算数の用意をしていると、となりの健也がそういつてしきりに首をかしげている。

「あっ！」

なにげなく、健也^{けんや}のほうに目をむけたぼくは、思わず声をあげていた。

健也^{けんや}が手にしているのは、真っ黒い紙で折られた、まるでカラスのようなものだった。

「つ、つくえのなかに入ってたんだ。いったいだれがこんなものを……？」

これって……カラスだよな？ よくこんな折り方^{かた}できるな。もしかしてこれって、手紙かなんかかな？」

そういいながら、健也^{けんや}はそうっと折り目^めをほどこいてみたけど、うらがわの白い部分^{ぶぶん}には、なにも書かれてない。

その折り方^{かた}はすごくふくざつでむずかしく、健也^{けんや}がいうように、小学生が



折ったとは思えないものだった。

「おれ、はやくきのうの話をみんなにしてやりたくて、登校はんにくわわらずに、ひとりで先に学校にきたんだよ。」

このクラスでは、おれがいちばん乗りだったから、おれがくるまえにだれかがこれをつくえに入れることなんか、できっこない。なあ新、どういことなんだ、これ？　だれがやったのかな」

健也がぼくに話しているあいだ、ぼくの目はその折り紙にくぎづけになっていた。

なんと目のまえで、完全に広げたはずの折り紙が、だれも手をふれていないのに、勝手にカサコソと動いて、元のクラスにもどろうとしている。

「ねえ、新、聞いている!？」

健也の声にはっとしたときには、黒い折り紙は、完全に元のクラスにもどっていた。

まだそれに気づいていない健也に、ぼくはものもいわず、折り紙を指さして伝えた。

「え！　あれ？　なんで元の形にもどってんの!？」

もうなんか気持ち悪いから、持ってるのいやだよ！　すてるのもこわいから

……新にあげるよ!」

そうはきすてるようにいうと、健也は元にもどった折り紙をぼくにおしつけ、教室を出ていってしまった。

だけどね、ぼくにとっては、なんだかその折り紙がみが、あのカラスそのものの
ような気がして、こわいとか気持ちきもちが悪いとかいうのとはちがう、もっと別な
なにかを感じていたんだ。

「あれっ？ なにこれ？」

手にした折り紙がみに、すこし違和感いわけんがある。

あらためて折り紙がみにさわってみると、初めに見たときよりふくらんでいて、
より立体的りったいてきになっていることに気づいた。

そのふくらみが気になったぼくは、もう一度、折り目おめをほどいてみることに
した。

「あっ、これはっ！」

折り紙がみのなかからあらわれたのは、くしゃくしゃに折れた、黒緑色くろみどりいろに光る本
物のカラスの羽はね。

ぼくは、その羽はねを教室のまどから、大空へかえしてあげた。

それっきり、その後はなにもふしぎなことは起きていない。

だけどぼくは、あのカラスのことを、一生わすれることはないだろうな。